



令和7年度

実践のまとめ



研究主題

子どもが、学びの主体となり、
学びを広げ、深める授業

～「協働的な学び」と「個別最適な学び」を基盤として～(1年次)



山形県立鶴岡養護学校



研究主題設定理由

なぜ「子どもが学びの主体」をねらうのか



子どもが「学びの主体」になることを狙うのは、

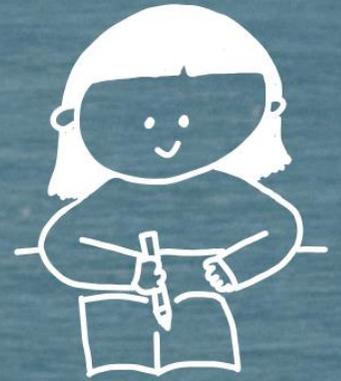
✓ 「子どもが自分のよさを生かしながら自分の持っている力を伸ばし、より高みをめざすことができる」から

大谷敦司先生(東北文教大学特任講師)の今年度の助言より

研究のねらい

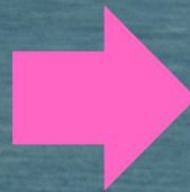
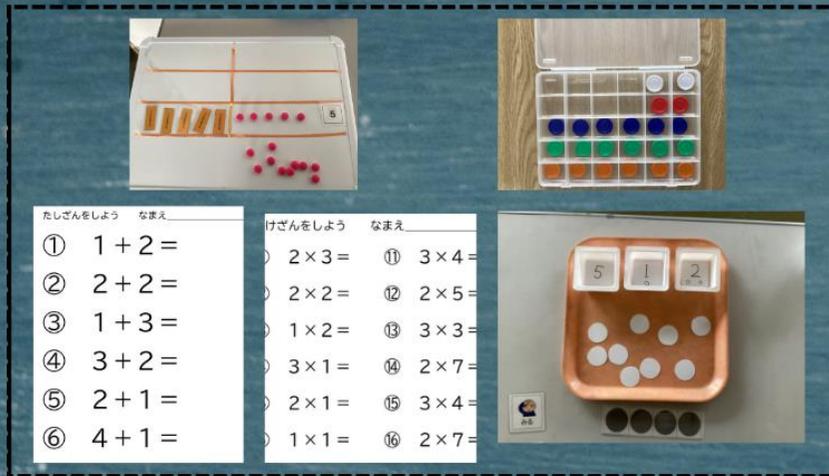
➡ 子どもが自分たちで学びを推進し、広げ、深め、日常で活用の利く、「生きて働く」学力を育成する。

子どもたちが「学びの主体」になるために 自分たちの授業を見つめ直すと...



一昨年度先生方より出された課題(主に国語/算数・数学)

- ・教師と1対1で与えられた課題に取り組む
- ・机上で1人での活動(机上で完結するタイプの独自教材やプリント)が多い



ちなみに...

この学び方で獲得した
知識・技能は

「不活性な状態」

(生きて働かない状態)

で蓄積します。

日常で活用の利く状態には
なりません。

- ・子どもの興味関心から離れている内容
- ・やらせられている状態で主体的とはいえない

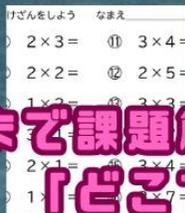
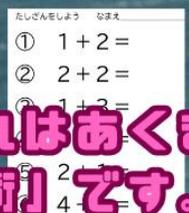
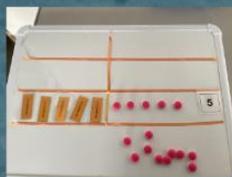
2

参考資料『「知識基盤社会を生き抜く子供を育てる」
編著 奈須正裕 久野弘幸 齊藤一弥 2019 ぎょうせい

学ぶ内容は、それが利用可能な実際的な場面と結びついて初めて「生きて働く学力」「日常で活用の利く学力」となります。

学ぶ過程では各教科の見方、考え方を働かせながら主体的に思考を巡らせ、自然と教科の目標に迫っていくこととなります。結果として各教科の資質・能力が育まれます。

教師側が扱いたい指導項目



これはあくまで課題解決の「手段」「術」です。「どこで使えば良いものなのか」がありません。

子どもの興味関心、実態に基づく内容 そして「最適解」を追究していく



活動中での課題を解決するために「手段」「術」を意識し、使いたくなるような実際的な場面が必要です。



- ・教師と1対1で与えられた課題に取り組む
- ・机上で1人での活動(独自教材やプリント)
- ・その場限りで「不活性な知識技能」



- ・例「バスにのってでかけよう」「●●でお買い物」で例えば「チケットを買う」「商品を注文する」場面などのしかけを施す。その中に指導したい項目を入れ込んでいくイメージ。

参考資料④「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して
伏木久始 奈須正裕編著 北大路書房2024

研究の方法

「学びのプラン」を活用することで授業づくりの発想を転換し子どもを「学びの主体」へ

- ・「子どもの興味関心、実態」を出発点にする
- ・「同一課題の一斉指導」、「教え込み」からの脱却をねらう
- ・主体的に思考を巡らせる中で学びを広げ深める内容を目指す
そのためには詳細な実態把握が必要
→客観的で根拠のある資料を用意

学びのプラン

高等学校1年 「国語科」
子どもが学びの主体になる授業
～「協働的な学び」～

「クロスワードの世界へようこそ」(全11時間)

授業者：小泉奈津子
場所：高等学校1-1教室

よりから)

B 教科実態確認表から 採

- ・書くこと
- ・聞くこと・話すこと

生活のどこに学ぶか
物事を多角的に捉え、
説明する力が身につくように
・クロスワードの活用

同一のテーマや教材 = 前のめりになるネタ
「〇〇を比べよう」などの同一課題の一斉指導とは違います。
クロスワードの世界へようこそ

3～9教時	広げる	10～11
分て解く。	<ul style="list-style-type: none"> ・個々で問題を作ってみる。 ・友達同士で出題し合う。 ・友達とペアになって問題を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な教師・もらった感について自

む学習課題(問い・気付き・感情)

E 子どもの特性と、単元で自らつかむ学習

「教科実態確認表」の活用

指導要領解説の各教科編から、指導項目を起し、ドロップダウンでできているか否かを記録する。客観的で俯瞰的、かつ根拠が明確な資料となり、できているところとできないところが一目瞭然。指導漏れもなくなる。

スクリーンショット: 実態確認表(国語 動画像.xlsx)

教科	指導項目	実態	備考
国語	読者の感情や態度を捉え、その理由を説明する。	○	
	登場人物の感情や態度を捉え、その理由を説明する。	○	

※「学びのプラン」については、別紙資料参考

※「教科実態確認表」については別紙資料参考

研究の方法

「学びのプラン」を実際に活用した声

・国語科、算数・数学科では使えるが指導項目がより明確な体育や音楽では使いづらい。より日常的に使える様式にする必要がある。

・指導したいことと子どもの興味関心との兼ね合いが難しい。

学びのプラン

高等部1年 「国語科」

子どもが学びの
～「協働的な学

ロスワードの世界へようこそ (全11時間)

授業者: 小泉奈津子

場所: 高等部1-1教室

振り返りから

B 教科実態確認表から 扱

- ・書くこと
- ・聞くこと・話すこと

同一のテーマや教材 = 前のめりになるネタ

「〇〇を比べよう」などの同一課題の一元指導とは違います。

クロスワードの世界へようこそ

生活のどこにつな

- ・物事を多角的に捉
- ・説明する力がつ
- ・クロスワードの

	3～9教時	広げる	10～11
分て解く。	・個々で問題を作ってみる。		・身近な教師
	・友達同士で出題し合う。		・もらった感
	・友達とペアになって問題を作る。		について自

学習課題(問い・気付き・感情)

E 子どもの特性と、単元で自らが学ぶ

※「学びのプラン」については、別紙資料参考



「学びの構想memo」(別紙参照)
へ改善を図り、より良いものへ

まずは意識改革！

「学びの主体」となって学んでいくために
授業者側が意識しておきたいこと



✓ 「子どもに身に付けさせたいこと、取り組ませたいことなどが先行した「指導内容ありき」で単元をつくると、子どもの気持ちを置き去りにした活動になりかねない」

長澤正樹 高木幸子 「子どもが学びを深める授業」2018 ジアース教育新社

✓ 「自身の生活と乖離した学習では、学ぶ目的を持ちにくく、自ら問いに対する答えに迫ろうとすることは難しくなる」

「意図的に手立てを講じる中で、生活とのつながりを考慮しつつ子ども自身が学習に向かうための目的をもてるようにすることが大切」

「学びが変わる！3つの手立てと実践例」

新潟大学附属特別支援学校 2025 ジアース教育新社



教師側の「教えなければ」という意識を変える

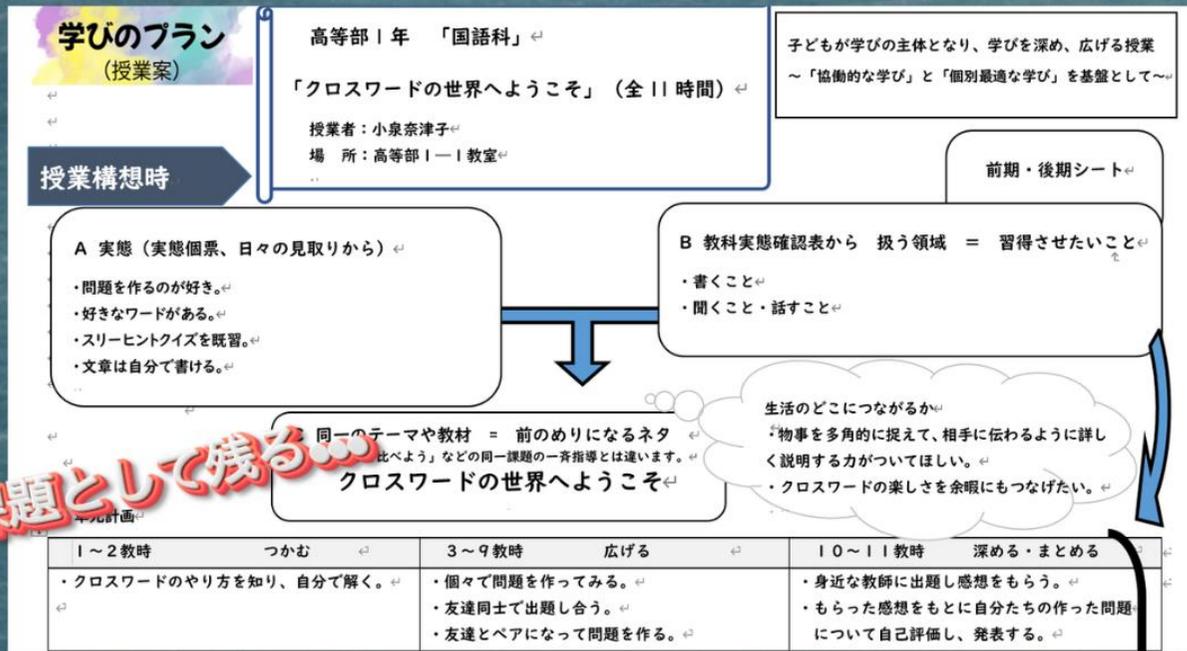
3回の授業研を振り返って 成果と課題

“学びの主体となって”

いきいきと活動する姿



「生活上の課題解決」に取り組む中で、 各教科の内容が習得されるスタイル(3回とも)



成果ですが

課題として残る

3回の授業研では子ども主体の学びが展開されたが、**職場全体としてはまだまだ浸透していない。**

授業づくりの出発点①「実態に合った内容」

次年度のチェックポイント!①

まずは難しく考えずに、その単元が、子どもたちが「やってみたい!」「面白そう!」「できそう!」

などと、意欲的に前向きに取り組める内容になっているかを意識する必要がある。

子どもの実態や生活経験から

日常生活の中で「子どもたちが好きな物・こと」から

既習経験を生かした、取り組みやすい内容から

成果ですが、課題として残る...

いずれも「最適解」を求める内容

→自然な学び方「協働的な学び」

参考資料 長澤正樹 高木幸子 「子どもが学びを深める授業」2018 シアース教育新社

3回の実践では

同じ活動だがそれぞれの教科の目標とそれぞれにあった支援→「個別最適な学び」

子どもの実態に合った内容

子どもの実態や生活経験から

日常生活の中で「子どもたちが好きな物・こと」から

既習経験を生かした、取り組みやすい内容から



1回目小学部研究授業
子どもたちが好きな「カレー」を題材に(実物の食材で)



2回目中学部研究授業
興味を持っている生成AI



3回目高等部研究授業
楽しく取り組んできた
クロスワードパズル

※授業の詳しい内容については別紙「学びのプラン」を参考として下さい。

子どもの実態に合った内容で

学年ではなく、特別支援は「段階」

Q. 小学1年生が分数を学ばないのはなぜ??

A. 発達上、抽象的な思考ができない。

発達段階の「器」に応じた活動、内容を

例：小学部1段階…1、2歳の発達段階を想定

当然、知的理解より行動的理解 実際的な生活の場面で学ぶ

参考資料 「新潟大学附属特別支援学校公開授業研 小学部事後研助言」

2025 新潟大学教育学部教授 有川 宏幸

||

授業づくりの出発点②「学習集団」

次年度のチェックポイント!①

・学習集団が大きすぎる(学部単位の授業など)…一斉指導が前提となり個別最適な学びからは離れ、教え込みにつながる

→前例踏襲になりやすく、今目の前にいる子に合った授業ではないかもしれない

・実態差が大きくなっている(自立、小1段階、3段階が同居)ことが、授業づくりに影響

→授業づくりが難しくなってしまうかもしれない

各学部で改善していく

「授業づくりの出発点①②」を各教科の豊かな学びつなげる
次年度のチェックポイント!②

「各教科の見方考え方を働かせ、問いを持ち
思考を巡らせながら学ぶ中で、資質・能力を育む」
成果ですが、課題として残る...

「子供の意識が対象となる教科等の内容に向かっていくように
実態にあった意図的な手立てを講じる必要があります。」

- ✓ 単元を仕組むに当たり、どの程度意識できているかが課題として残る。
また「意図的な手立て」は、子どもたちの実態に合ってるかも意識したい。

参考資料 新潟大学附属特別支援学校 「学びが変わる!3つの手立てと実践例」2025ジアース教育新社

教科の見方、考え方が自然と働き、 教科の内容に迫る「意図的な仕掛けと手立て」

職場全体としてはまだまだ浸透していない。

1回目研究授業(小学部)



2回目研究授業(中学部)



3回目研究授業(高等部)



「こんなカレーがいいな」→「一人一人違う食材を使ったがり、互いのことが自然と気になるしかけ」→「言葉やイラストなどで伝え合う場を設ける」という手立て→対象と言葉の関係を捉え、言葉への自覚を高める(見方・考え方)→日常生活で伝え合う力を身につける(資質・能力)

「AI画像生成でこんな●●が見たい」→「構文にしてAIに指示を出す」に意欲的になれるしかけ→イラスト、言葉カードなど個人に合った手立て→言葉と言葉の関係を捉える(見方・考え方)→日常生活に必要な国語について、特質を理解し使うことができる。(資質・能力)

「友達とクロスワードを出し合う」→「出し合う」というしかけ→ワードとして使いたい言葉を相手に分かるようにどう説明したらいいか分からない→「辞書やGeminiを使っていい」という手立て→言葉調べを通して言葉への自覚が高まる(見方・考え方)→人との関わりの中で伝え合う力、思考等を高める(資質・能力)

子供の意識が対象となる教科等の内容に向かっていくように意図的な手立てを講じている

次年度のチェックポイント! ③

「概念化=使える知識化」を意識

大谷敦司先生(東北文教大学特任講師)の今年度の助言より

今年度の実践で
いうと...

普段の生活で思いや要求を自分から伝える

普段の生活で思いや要求を伝わりやすい表現で伝える

普段の生活で相手を意識して言葉を選んで伝える

単元が終わった後、学びが「生きて働く」よ^{など}
うに...単元を通してそのイメージを持つ

※「概念化」については大谷先生の今年度の助言に関する別紙資料を参考にしてください。

次年度に意識したい3つのチェックポイント

「学びの構想memo」等で具現化!



授業づくりの出発点を改めて意識する

子どもの実態や生活経験から
子どもたちが好きな物・こと
既習経験を生かした、取り組みやすい内容
実態(段階等)に応じた学習グループ

「協働的な学び」「個別最適な学び」
が前提となり学びの主体に

子どもが、各教科の見方・考え方を働かせながら、 各教科の資質・能力を育むための意図的な仕掛け、手立てを講じる

「教える内容の研究やその系統の把握が不可欠」学びを広げ、深める手立て
第3回授業研の大谷先生の助言より

学んだことの「概念化(=使える知識化)」

「これからの授業で大切にしたい5つの方向性」学んだことが生活で生きる
第2、3回授業研の大谷先生の助言より

令和8年度研究主題

子どもが、学びの主体となり、

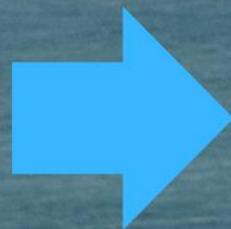
学びを広げ、深める授業

～「協働的な学び」と「個別最適な学び」を基盤として～



〔1年次〕

- 「学びのイメージ図」による授業づくり
- 各学部での授業実践
- 研究の成果と課題の分析
- 2年次の方向性の確認



〔2年次〕

- 「学びの構想memo」と3つのチェックポイントでの授業づくり(授業づくりのポイントの焦点化)
- 各学部での授業実践
- 研究の成果と課題の分析
- 3年次の方向性の確認

課題を基に
焦点化!

令和7年度公開研究会大谷先生助言より

今年度3回の授業研を行いました。いずれも大谷敦司先生(東北文教大学人間科学部子ども教育学科特任講師)よりご助言をいただきました。お話しいただいた中で、ポイントとなりそうな、「**今後の授業づくりで大切になってくる5つの方向性**」についてご紹介します。職員にとっては教員としてどれだけ意識できているかの「**現在地**」を測る一つの指標と言えるものです。

子ども主体の学びの意味を毎回分かりやすく教えていただきました!

「**子どもが主体的に学んだ方が、自分のよさを活かしながら、自分の持っている力を伸ばし、より高みを目指すことができる。」**



「これからの学力」

1人が、どのような仲間と、どのような物と、どのような資料と、関わって問題を解決していけるか。

今後の授業づくりで大切になってくる5つの方向性

◇ 主体性

「子どもが主体的に学んだ方が、自分のよさを活かしながら、自分の持っている力を伸ばし、より高みを目指すことができる。」

子どもの好きなものを最大限に生かした組み立て



◇多様性・包摂性

①多様性…障がいなど、その子の実態、興味関心、得意なこと

②包摂性…①のお互いの個性、能力が尊重される。

包摂する…認められ一員として貢献できる機会がある。存在が価値のあるものとして認められる。

授業でその場面をどうつくっていくかが課題

生成AIでの画像
生成に興味あり



書くのが得意、
キーボードで打
ち込むのが得
意



◇ デジタル基盤

互いに不利なこと、苦手なことを補う。

今回はAIを使うことによって、言葉と実像が結ばれ、自分の打ち出した言葉が妥当かどうか判断しやすい。



文が画像に!

教師のデジタル基盤の技量が問われる。

◇柔軟性(内容・時間)

「今日の目標がここだから、ここまでいかなければ、という授業が散見されるが、無理やり引っ張っても身につくわけではない。あくまでも子どもに合わせて授業を進めていく必要がある。」



子どもの様子から活動内容の変更を判断した場面。

子どもに合わせる必要がある。

内容の構造化

主語と述語、助詞の用法…これでいいのか問い直しながら

教科で大切にしたいところ(見方、考え方が)
「自分で物語をつくる」ということで行われている。

① 中核的な問い

どう指示を出すとAIが画像を作ってくれるかな

③ 概念 主語、述語、助詞...

② 具体的な体験・知識

「食べる」「ゾウ」「バナナ」...

④ 概念の位置づけ

主語と述語が！
普段もいろいろな場面で役立ちそう！

使える知識＝概念化

※ 「内容の構造化」に関しては大谷先生のお話しを受け、第2回の中学部国語の授業にあてはめてみたものです。23